

七卿回天史略

渡辺三男

一、はじめに

- 二、七卿都落ち
- 三、七卿銘々録
- 四、七卿詠藻抄

一、はじめに

関ヶ原の決戦で、東軍徳川方に立ち向かった、西軍の総大将は、毛利氏の三代目輝元と目された。

今年正月から始まつた、N・H・Kのいわゆる大河ドラマで、毛利氏の初代元就が、主人公として脚光を浴びているお蔭で、毛利一門のことが、世間によく知られるようになった。

念のために繰りかえせば、毛利氏は、本姓大江氏。平城天皇の皇子阿保親王より起る、と伝える。親王の侍女某

が、親王の御子を、お腹にしたまま、備中介大枝本主に嫁して、音人は、初め大枝氏を称していたが、貞觀十八年（八七六）十月、改めて、大江朝臣を授けられた。

音人—千古—維時—重光—匡衡—拳周—成衡—匡房—維順—維光—広元と繼承して鎌倉期に及んだが、いずれも、学芸に長じ、中でも維時は、醍醐・朱雀・村上三朝の侍講。參議を経て、中納言となる。博聞強記で、平安遷都以来の建物の変遷や人物の死没や年月をよく記憶していた。江相公と称された。

識見殊に卓抜の聞え高かつた大膳大夫広元は、鎌倉幕府の初代の將軍源頼朝の知遇を受けること殊に篤く、初期幕政に、貢献するところ多大であった。

広元の四男季光が、相模国毛利庄の地頭職に補せられて以後、毛利氏を名乗るようになり、その孫修理亮時親が、建武二年（一三三五）安芸国吉田の地頭職に補せられて、安芸に遷り、元就の時、四周を制圧して、山陰・山陽十余国を領有した。その孫輝元は、天正十年豊臣氏に属して、安芸・周防他七箇国を与えられ、徳川幕府の天下となつて、長門・周防両国を与えて萩に城居したが、幕末近い敬親たかちかの時、山口に移城して、徳川幕府の大政奉還、各藩主の版籍奉還に率先し、明治の授爵で公爵、山口県令（後に県知事）を名乗つた。

私の村にも、毛利公爵家の支藩家と称する毛利男爵家があり、小学・中学に同窓の毛利さんがいた。私どもが、そのお屋敷の同窓の先輩を、向かってはいわなかつたが、蔭では、毛利・毛利と呼び捨てにすると、母が、△毛利さま／といいなさいとたしなめた。

私の生家のすぐ近くに、毛利男爵家の菩提寺曹洞宗天徳寺があり、それに隣接して五輪の塔の林立する毛利男爵家の広い広い立派な墓園があつた。私ども近くの子供らの、もつてこいの遊び場所にもさせていたが、今はどうなつた

か。私が、殊更に、墓地ともお墓場ともいいたくないのは、子供心にも、はるかに、格式のちがいを感じたからである。

お住職永井大暁老師は、生涯迎妻を避けた行持綿密の禪僧で、数人の若い雲水を、隣の街（現防府市）に在る曹洞宗立第四中学校（現多々良学園高校）へ通わせていた。私は、同じ街に在る県立中学（現防府高校）を卒業したが、永井老師に勧められて、宗立の駒沢大学の東洋学科へ進んで、有縁半世紀、現在名誉教授。戦前からの元教授は、他にはいなくなつた。永井老師の、昔日の愛語を忘れてはならない。

私も、上京以来六十六年、敗戦を経て、日本の国も大きく変つた。学生の頃、新年には、毎年、山口県出身の男女学生が、高輪の毛利公爵邸へお招きを受けて。お屠蘇を頂くのが恒例であつた。今ではとても、あんなに大人数を集める広い場所そのものが無いのではないか。

今年の正月、高輪の和彌館というところで、山口県人会の新年会が催されたが、私が、出席者中の最年長者で、往年の学生時代を語りあう相手は、一人もいなかつた。

和彌館は、旧高松宮邸だったとも聞いた。その旧高松宮邸は、元長州毛利藩の下屋敷跡という人もあつた。

二、七卿都落ち

私が、七卿都落ちに強い関心を抱いているのは、生来の郷土びいきの上に、その地三田尻が、私の出身中学（現県立防府高等学校）の地元であるからだ。

関ヶ原の決戦で、大勝を博したとき、徳川家康は、西軍に味方した毛利氏を、山陽・山陰一円の大守から、防・長二州に削封し、居城も、日本海の荒波洗い、寒風吹きすさぶ、最も辺僻の地萩に押しこめた。

毛利氏は、山口、三田尻（防府）等、居城として自然環境や伝統文化の継承ほか、なにかと有利な地を、希望したとの説もあるが、いかが。

山口は、小京都とも呼ばれ、四周を山に囲まれた要害の地であり、大内氏以来、京・半島・大陸の文物を、意欲的に攝取しようとしてきた、豊かな伝統に裏づけられた含蓄に富む地方都市であり、防府は、県下第一の広くて肥沃な平野と、水・陸の交通の便と、多様な産物に恵まれたこれまた歴史ある土地であり、律令時代の古い国府の地でもある。

毛利藩では、正月三日に、△御廊下の儀△と称する儀式が行われてきたと伝える。城中大広間で、お殿さまと家臣一同が、うちそろって新年のご挨拶を終えて、いざ、お殿さま奥御殿へ立ち去ろうとなさるとき、筆頭家老、小走りに殿を呼び止め

△殿、徳川征伐は、いかがいたしましょうや△

△そうだのう、しばらく待て△

というお決まりの掛け合いが、維新の年の正月に到り、

殿のお答えが

△考えておこう△

と、変ったというのはいかが。作り話かもしないが、さて、このお廊下寸劇の作者は誰か。ここにはいないか。

関ヶ原の大乱を教材に、ちと工夫なされてみてはいかが。

旧里程で、萩から山口まで五里。山口から三田尻（防府）まで五里。その防府地区から山口地区へ踏み入れる境界をなすところに、佐波（鯖）山峠があり、明治のいつごろか、洋式の工法によるトンネルが掘削されるまでは、人も馬も、歩いて峠を越えた。

明治の初め、明治天皇が、維新に功のあった、毛利家慰労のため、山口へ行幸なされた際も、お輿で、このコースをお進みになつた。お召艦で、瀬戸内海三田尻湾の問屋口からご上陸、今の防府市宮市を経て、まだ鉄橋も無かつた佐波川を船橋で渡り、僅かに町並のあつた右田市を経て、佐波山峠への坂道をお進みになつた。道の左側に、剣川という谷川がある。その川の名は、右田市のはずれに鎮座する武神スサノオノ命を祀る県社剣神社に因んだもの。鯖山トンネルに近い、上り坂の右側に、御影石で構築した台場と称する小高い堡壘の跡も残つてゐる。御城下萩・山口への敵襲を防ぐための備えであろう。

萩から三田尻へのこの道は、長州藩の幹線道路で、参勤交代のお殿さまが行列を組んだから、お成り街道ともいい、フランスコザビエルが、山口へ向かい、坂本龍馬が、萩へ向かつた道である。

罪人用の唐丸駕籠とうまるかごで護送された松陰先生は、防府天満宮の拝殿前の朱塗の樓門から、商家櫛比する防府の市街の人馬歩む通りまで続いてゐる、大石段のはずれ近い一の鳥居の柱の根元で、松陰は、駕籠から下り、かねてから親しかつた鈴木宮司と別れを惜んだ。ふたたび会うことはできなかつた。

私の出た周陽中学校（現防府高等学校）の南側、幅二米ほどの側溝（というには幅のある水の流れ）と県道を隔て

て、香取家があつた。

香取素彦も、維新期の志士の一人で、松陰先生とも親しく、先生刑死後、一時素彦先生が、松下村塾を見ていたこともあつた。

松陰先生の令妹文さんは、初め、高杉晋作と並ぶ先生の高弟久坂玄瑞に嫁したが、蛤御門の戦で、玄瑞戦死後、素彦夫人となつた。

会津・鹿児島の連合勢と、長州勢とが戦い、長州勢が敗れたのがこの戦い。

香取家から、少し南へ下つたあたりに、ひときわ目立つ、風雅をこらした大きい和風の建物と、広々とした庭園のお屋敷がある。幕末の旧藩主毛利敬親たかちか公の迎賓館であり、保養の場所として設けられたところで、その名も、公の志をそのままに、招賢閣と称したが、以来数多くの内外知名の人物が、ここに客となつた。

京都の佐幕派に追われ、尊攘派長州兵二千余名に護られて、長州へ下つた例の七卿も、しばらくはここにいた。これから山口へ、山口から長府へ、長府から、九州大宰府へと落ちていった。

王政復古成る。安んじて帰京せよ、との朝命の下るまで、大宰府天満宮の延寿王院で、鬱を散じていた。

筑前の勤皇の志士で、水天宮の神官、平野国臣が、七卿中のもつとも血氣の公家沢宣嘉よしよしを、夜陰に乗じて誘い出し、生野の銀山に義兵を挙げたが、戦破れて、国臣は、豊岡藩の兵に捕えられて、京都で斬られ、宣嘉は、変装して一旦四国へ逃亡したが、維新後、知己を頼つて長州に現われ、新政府に仕えて、参与、九州鎮撫総督兼外國事務総督、長崎裁判所総督、外國官知事、初代外務卿等を歴任した。

時遷つて、私の学生時代には、招賢閣は、毛利元藩主家で使用することもなく、隣の加藤家で管理していた。加藤

家は、私の父の姪の嫁ぎ先だったから、大学の長い休みには、私は、海も近いこの家の世話をした。それからさらに半世紀ほど経て、一両年前に、訪ねて見たら、曾てのお殿さまのお庭には、幼稚園の幼児が、元気よくかけまわっていた。

今、私のテーブルの上にも、明治四十五年三月十五日池邊義象の手に成る『七卿落ち』と題する一書が置いてある。仮綴。菊版よりもやや大きめ。本文一七八頁。東京神田辰文館、京都寺町松田庄助発行となつていて。(定価六十銭)とは、安かつたが、その本が、今、古書価額一万五千円になつた。私の生まれた、三・四年後のことであるが、図書の上にも、私の身の上にも、歴史は足早、との感慨一入である。

完成したばかりの、赤坂の今の首相官邸へ、最初に入られた、田中義一総理から、郷里出身の男女学生数十人が、お招きを受けた。郷里の先輩たちが、なんとか、後輩たちを叱咤しようとされた、配慮のほどがよくうかがえた。

赤坂の新築首相官邸では、平常、△オラガ▽△オラガ▽(「おれが」「私が」の山口県方言▽)を連発して、「オラが大将」と人気のあつた、(△オラがビール▽という新しい便乗銘柄のビールまで売り出された)総理大臣田中義一大将のご挨拶はなかつた(従つて、新鮮な、ご本人直伝の△オラ▽は聞きそこねたが、招待された学生の中に、義一大将の)一粒種で、戦後文相にもなり、私も県人の会で幾度もお会いしているうちに親しくなつた龍一さんがいた。

私も、来々四月には、卒寿とか、何もしないうちに、歳月は、容赦もなく、駆け抜けた。

三、七卿銘々錄（『明治維新人名辭典』等参照）

三条実美（さんじょうじみくに／一八三七—一八九一）

堂上公家（清華家）。尊攘派公家の中心人物。文久二年十月攘夷督促の勅使として江戸下向、翌三年長州藩と提携して大和行幸・攘夷親征を企図するが、八月十八日の政変で失脚。同志公家六人とともに長州に下向し、官位を停められたが、王政復古により官位を許され、入洛を許され、議定に任せられた。累進して副總裁、輔相、大政大臣、内大臣、内閣總理大臣ほか。没して国葬。

三条西季知（さんじょうにしそえども／一八一一—一八八〇）

堂上公家（大臣家）。文久二年国事書記御用掛、議奏加勢、国事御用掛。文久三年八月十八日の政変により参内・外出・面会を禁止され、同志公家六人とともに長州へ下り、官位を奪われる。王政復古によって官位復旧、入京を許され、参与に補され、権大納言ほかに進む。明治七年、神宮祭主に挙げられる。

東久世通禧（ひがしくぜみちとよ／一八三三—一九一二）

堂上公家（新家）。文久二年五月国事書記御用掛、翌三年二月国事參政となり、三条実美らと攘夷貫徹を唱えるが、八月十八日の政変（会津・薩摩の両藩を背景とする公武合体派の策動によって、長州藩を頼みとする尊皇攘夷派の廷臣や諸藩の志士が失脚、参朝を禁ぜられ、官位を停められた。王政復古により許されて帰京、参与に挙げられた。ついで軍事參謀、外國事務總督、神奈川府知事、開拓長官、元老院副議長、貴族院副議長、枢密院副

議長ほか。

壬生基修（一八三五一一九〇六）

堂上公家（羽林家）。文久三年二月国事寄人に挙げられたが、八月十八日の政変で失脚、六人の同志と長州へ下る。明治元年正月、参与、ついで御親兵用掛、越後府知事、東京府知事、山形県権令ほかを歴任、明治八年元老院議官。

四条隆謙（一八二一八一一八九八）

堂上公家（羽林家）。文久三年攘夷決行を建議して、国事寄人に列したが、八月十八日の政変で失脚、同志の公家六人と長州へ下り、官位を停められた。王政復古によつて復官。明治元年の戊辰戦争では、征討大将軍嘉彰親王に従つて、錦旗奉行、各鎮台司令官を歴任、明治十四年二月、陸軍中将に進み、元老院議官を兼ねた。

錦小路頼徳（一八三五一一八六四）

堂上公家（半家）。文久三年二月国事寄人に捕せられ、三条実美ら同志と共に、攘夷親征・大和行幸を企図したが、同年八月の政変で失脚。三条実美等六人の同志公家と長州へ下つたが、元治元年三月、下関で病没。

沢宣嘉（一八三五一一八七三）

堂上公家（半家）。早くから、三条実美等と攘夷貫徹を唱え、文久二年五月国事御用書記、翌年二月国事寄人に任せられたが、翌文久三年（一八六三）八月十八日の政変＝会津・薩摩の両藩を背景とする公武合体派によつて、長州藩を頼みとする尊皇攘夷派の廷臣や志士が参朝を停められ、三条ら六人とともに長州へ下る。これらの公家は、急拠東山阿弥陀ヶ峰の無住の廃院妙法院に集まつて協議の結果、一旦長州藩を頼つて西下し、後図を策

することに決し、雨の中を、蓑・笠・草履ばき、全く馴れない姿で、長州藩の兵士二千人に護られながら竹田街道を長州藩の船団の待つ兵庫港へ向かった。

その姿は、一行中、絵心のあつた沢によつて描かれたものが、今に残り、歴史の教科書などに載せられている。

四、七卿詠藻抄

(読む人、夫々七卿の心境を想察して、歌詠を試みられたし。)